

日本画

にし だ しゅん えい
西 田 俊 英



推薦理由

氏は、奥村土牛^{とぎゅう}先生に師事し日本画の真髓を受け継ぎ、日本画壇の秀逸な画家と注目されている。魅力ある四次元の幻想的空間を表現する氏を、日本芸術院会員にふさわしい画家として推薦する。

【略歴】

昭和28年4月20日 三重県生まれ 64歳
昭和50年 再興第60回院展初入選（「夏の日」に対して）
昭和52年 武蔵野美術大学造形学部日本画科卒業
平成5年 文化庁芸術家在外研修員（インド）
平成7年 （財）日本美術院特待（同10年同人，同24年評議員，同28年理事，現在まで ※同23年公益財団法人へ移行）
平成12年 広島市立大学芸術学部教授（同24年名誉教授，現在まで）
平成24年 武蔵野美術大学造形学部日本画学科教授（現在まで）

【賞歴】

昭和45年 中部春陽会賞（「レクイエム」他に対して）
昭和58年 山種美術館賞展優秀賞（「華鬘^{けまん}」に対して）
昭和59年 東京セントラル美術館日本画大賞展大賞（「聖牛^{せいぎゅう}」に対して）
平成7年 再興第80回院展日本美術院賞・大観賞（「プシュカールの老人」に対して。後に他作品でも受賞）
平成8年 足立美術館賞（「プシュカールの老人」に対して。後に他作品でも受賞）
平成8年 再興第81回院展奨励賞（「寂光^{じゃっこう}」に対して）
平成8年 天心記念茨城賞（「寂光」に対して）
平成14年 再興第87回院展文部科学大臣賞（「キング」に対して）
平成17年 再興第90回院展内閣総理大臣賞（「きさらぎの月」に対して）
平成24年 MOA岡田茂吉賞大賞（「飄々^{ひょうひょう}海々^{かいかい}」に対して）
平成26年 春の足立美術館賞（「観^{かん}」に対して）
平成29年 日本芸術院賞（「森の住人^{もり すみびと}」に対して）

洋画

ね ぎし ゆう じ
根 岸 右 司



推薦理由

氏は、油絵で40数年にわたり北の大地の厳しい自然を題材として、日本の風景を描き続けている画家である。日本の風土の香りをキャンバスに取り込んだ作品を発表し続けており、日本芸術院会員にふさわしい画家として推薦する。

【略歴】

昭和13年3月20日 埼玉県生まれ 79歳
昭和35年 光風会展初入選（「休日」に対して）
昭和36年 埼玉大学教育学部美術科卒業
昭和36年 渡邊武夫に師事
昭和36年 日展初入選（「街」に対して）
昭和62年 埼玉県立浦和高校教諭（平成10年まで）
昭和63年 埼玉県高等学校文化連盟美術・工芸部門部会長（平成10年まで）
平成3年 （社）光風会評議員（同20年理事，同25年常務理事，現在まで ※同24年一般社団法人へ移行）
平成8年 全国高等学校文化連盟美術・工芸専門部会長（同9年まで）
平成8年 日展審査員（以降5回就任）
平成20年 （社）日展評議員（同26年まで。同28年理事，現在まで ※同24年公益社団法人へ移行）

【賞歴】

昭和39年 光風会展50回記念賞（「競馬場風景」^{けいばじょうふうけい}に対して）
昭和53年 光風会展会員賞（「廃鉱への道」に対して）
昭和58年 光風会展寺内萬治郎賞（「廃鉱」に対して。後に他作品でも受賞）
昭和62年 日展特選（「鉱山寥乎」^{こうざんりょうこ}に対して。後に他作品でも受賞）
平成4年 光風会展つばき賞（「ずり山の冬」に対して）
平成7年 光風会展辻永記念賞（「空知雪天」^{そらちせつてん}に対して）
平成27年 改組新第2回日展内閣総理大臣賞（「北海の岬」に対して）
平成29年 日本芸術院賞（「古潭風声」^{こたんふうせい}に対して）

建築

いそ ざき あらた
磯 崎 新



(撮影 木奥 恵三)

推薦理由

氏は、1960年代から先鋭的な建築設計で知られ、「ポストモダン建築」を牽引した建築家とも評され、特に美術館や劇場等、芸術をめぐる空間の設計で定評がある。建築評論や展覧会企画にも取り組むなど、日本国内はもちろん国際的にも活躍しており評価も高く、日本芸術院会員にふさわしい建築家として推薦する。

【略歴】

昭和6年7月23日 大分県生まれ 86歳
昭和29年 東京大学工学部建築学科卒業（同36年、数物系大学院建築学博士課程修了）
昭和38年 磯崎新アトリエ主宰（同46年、代表取締役、現在まで）
昭和49年 ハワイ大学客員教授
昭和51年 コロンビア大学客員教授（同54年、再就任）
昭和56年 ハーバード大学客員教授
昭和57年 イェール大学客員教授
平成6年 英国王立芸術院名誉会員
平成10年 米国芸術文化アカデミー名誉会員

【賞歴】

昭和44年 芸術選奨文部大臣新人賞（「福岡相互銀行大分支店」に対して）
昭和58年 毎日芸術賞（「つくばセンタービル」に対して）
昭和59年 フランス芸術文化勲章シュヴァリエ
昭和61年 英国王立建築家協会（RIBA）ゴールドメダル
昭和62年 マルモマック国際建築賞（「ロス・アンジェルス現代美術館」に対して）
昭和63年 朝日賞（「建築を通しての現代文化への貢献」に対して）
昭和63年 アーノルド・ブルンナー記念賞
平成4年 米国建築家協会（AIA）荣誉賞（「ティーム・ディズニー・ビルディング」に対して）
平成5年 日本文化デザイン大賞（「『くまもとアートポリス』コミッショナー」に対して）
平成8年 ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展 金獅子賞・パビリオン賞（「日本館コミッショナー」に対して）
平成9年 スペイン文民功労勲章大十字賞
平成19年 イタリア共和国功労勲章
平成29年 ロレンツォ・イル・マニーフィコ生涯功労賞

小説・戯曲

たか ぎ のぶこ
高 樹 のぶ子

(本名 つる た のぶ こ
鶴 田 信 子)



推薦理由

氏は、芥川賞受賞作「^{ひかりいだ}光抱く友よ」(昭和59年)を中心とする初期の作品以来、数多くの短編小説、長編小説を盛んに発表し続けてきた。その作品活動を通して、家族、友人、恋愛関係にある男女の間に、微妙に隠れ動く感情の起伏を、多様な視点から精巧に描きわけるところに、優れた個性が認められる。長編においては「^{とうこう き}透光の樹」(谷崎潤一郎賞)、短編においては「トモスイ」(川端康成賞)にその最高の成果が示されている。それらの業績を総合して、日本芸術院会員に推薦するにふさわしい存在と判断することができる。

【略歴】

昭和21年4月9日 山口県生まれ 71歳

昭和43年 東京女子大学短期大学部教養学科卒業

平成13年 芥川龍之介賞選考委員(現在まで)

平成17年 九州大学アジア総合政策センター特任教授(同22年まで)

【賞歴】

昭和59年 芥川龍之介賞(「^{ひかりいだ}光抱く友よ」に対して)

平成6年 ^{しませ}島清恋愛文学賞(「^{つたもえ}蔦燃」に対して)

平成7年 女流文学賞(「^{すいみやく}水脈」に対して)

平成11年 谷崎潤一郎賞(「^{とうこう き}透光の樹」に対して)

平成13年 西日本文化賞・社会文化部門

平成15年 福岡県文化賞・創造部門

平成18年 芸術選奨文部科学大臣賞(「^{ほ っ か い}HOKKA I」に対して)

平成21年 紫綬褒章

平成22年 川端康成文学賞(「トモスイ」に対して)

平成29年 旭日小綬章

平成29年 日本芸術院賞(「様々な類型の人間関係の機微を緻密に考察し、豊かな物語性を織りこんだ小説を造型した業績」に対して)

小説・戯曲

むら た き よ こ
村 田 喜代子



推薦理由

氏は、芥川賞受賞作「鍋の中」（昭和62年）を頂点とする初期の作品群以来、40年を超える活動を積み重ねてきた。その間、多彩な領域にわたって、いずれも注目すべき成果を収めてきた。現代の家族関係の機微を考察したこともあれば、民話風の棄老伝説（きろうでんせつ）を手がけたこともある。奥深い山村の女たちの飄逸（ひょういつ）な暮らしぶりに着目したこともあれば、17世紀の渡来人陶工を主人公にする歴史小説の長編を完成したこともある。それら多彩な業績は、いずれも豊かな物語性に彩られるとともに、幻想的な色彩を散りばめて、独自の小説世界を創りあげている。

【略歴】

昭和20年4月12日 福岡県生まれ 72歳
昭和35年 八幡市立花尾中学校卒業
平成10年 泉鏡花文学賞選考委員（同27年まで）
平成14年 川端康成文学賞選考委員（現在まで）
平成17年 九州芸術祭文学賞最終選考委員（現在まで）
平成26年 紫式部文学賞選考委員（現在まで）

【賞歴】

昭和62年 芥川龍之介賞（「鍋の中」に対して）
平成2年 女流文学賞（「白い山」に対して）
平成9年 紫式部文学賞（「蟹女」に対して）
平成10年 川端康成文学賞（「望潮」に対して）
平成11年 芸術選奨文部大臣賞（「龍秘御天歌」に対して）
平成19年 紫綬褒章
平成22年 野間文芸賞（「故郷のわが家」に対して）
平成26年 読売文学賞小説賞（「ゆうじょう」に対して）
平成28年 旭日小綬章

詩歌

たか はし むつ お
高 橋 睦 郎



(撮影 ヨルゲン・アクセルヴァル)

推薦理由

氏は、処女詩集「ミノ・あたしの雄牛」（昭和34年）をはじめとする初期作品以来、多産な詩人として注目されてきた。不遇な運命を背負った自己憐憫^{れんぴん}の感情を主調とする若年の頃の作風から脱して、玲瓏^{れいろう}な古代への憧憬^{しょうけい}を織りこんだ詩法に転じた時期以降（例えば「王国の構造」（昭和57年）がその例証である）、現代詩の世界において特異な孤高の位置を占めている。さらに、古代ギリシャ・ラテン文学の特質を考察する業績を発表しているが、それを詩作の実践と更に密接に結びつけることが期待される。また俳句作者としても、近年高い評価を受けている。

【略歴】

昭和12年12月15日 福岡県生まれ 80歳
昭和34年 詩集「ミノ・あたしの雄牛」でデビュー
昭和37年 福岡学芸大学（現・福岡教育大学）学芸学部中学校教員養成課程卒業
平成14年 高見順賞選考委員（同19年まで。同27年から現在まで）
平成16年 （財）高見順文学振興会理事（現在まで ※同25年公益財団法人へ移行）
平成24年 読売文学賞詩歌俳句賞選考委員（現在まで）
平成29年 俳句甲子園審査委員長

【賞歴】

昭和57年 藤村記念歷程賞（「王国の構造」^{おうこく こうぞう}に対して）
昭和63年 高見順賞（「兎の庭」^{うさぎ にわ}に対して）
昭和63年 読売文学賞・詩歌俳句賞（「稽古飲食」^{けい こ おんじき}に対して）
平成5年 現代詩花椿賞（「旅の絵」^{たび え}に対して）
平成8年 詩歌文学館賞（「姉の島」^{あね しま}に対して）
平成12年 紫綬褒章
平成19年 日本詩歌句大賞・俳句部門（「遊行」^{ゆうぎょう}に対して）
平成19年 織部賞
平成22年 現代詩人賞（「永遠まで」^{えい えん}に対して）
平成24年 旭日小綬章
平成26年 鮎川信夫賞・詩論集部門（「和音羅読－詩人が読むラテン文学」^{わ おん ら どく}に対して）
平成29年 蛇笏賞（句集「十年」^{じゅうねん}に対して）
平成29年 俳句四季大賞（句集「十年」に対して）
平成29年 文化功労者

わた なべ たもつ
渡 辺 保

(本名 わた なべ くに お
渡 辺 邦 夫)



推薦理由

氏は、演劇の各種の領域において、幅広く活発な評論活動を展開してきた。とりわけ歌舞伎、能、狂言など伝統演劇の分野に関しては、歴史的に形成されてきたその本質を探究するのみならず、古典劇の内部から現代性を掘り起こそうとする注目すべき試みを継続している。こうした伝統と革新の統合を目指す顕著な業績によって、現代の演劇評論全般を牽引する指導的な立場をおのずから占める存在となっている。また特筆すべきことは、明晰にして格調高い文体による評論が、文学作品として高度の水準に達していることである。

【略歴】

昭和11年1月10日 東京都生まれ 81歳

昭和33年 慶應義塾大学経済学部卒業

昭和33年 東宝株式会社入社（同62年まで）

昭和40年 「歌舞伎座に女優を」で評論デビュー

昭和62年 淑徳短期大学国文学科教授（平成8年淑徳大学国際コミュニケーション学部文化コミュニケーション学科教授，同14年まで）

平成14年 放送大学教養学部教授（同18年まで）

【賞歴】

昭和50年 芸術選奨文部大臣新人賞（「女形の運命」に対して）

昭和57年 平林たい子賞（「忠臣蔵 もう一つの歴史感覚」に対して）

昭和57年 日本演劇学会河竹賞（「忠臣蔵 もう一つの歴史感覚」、「俳優の運命」に対して）

昭和62年 読売文学賞研究・翻訳賞（「娘道成寺」に対して）

平成6年 吉田秀和賞（「昭和の名人 豊竹山城少掾」に対して）

平成7年 芸術選奨文部大臣賞（「四代目市川団十郎」に対して）

平成10年 読売文学賞評論・伝記賞（「黙阿弥の明治維新」に対して）

平成12年 紫綬褒章

平成21年 旭日小綬章

平成25年 河竹賞（「明治演劇史」に対して）

平成29年 恩賜賞・日本芸術院賞（「演劇全般、特に伝統演劇の本質を綿密かつ精緻に探究した長年にわたる評論の業績」に対して）

能楽

やま もと とう じ ろ う
山 本 東次郎



推薦理由

氏は、^{さんせ}三世東次郎の長男として生まれ、幼少より父の厳格なる薫陶を受け、江戸式楽狂言の古格を守る、剛直にして端麗な芸系を的確に継承している。加えて近年、人間味豊かな感性を基にした独自の芸風を確立している。また、新作狂言の創作に携わるなど才能は多岐にわたる。重要無形文化財（各個認定）、日本芸術院賞を始め、数々の受賞等、能楽界の第一人者として、その充実した知性^{あふ}溢れる舞台存在は、^{しかい}斯界すべてが認めるところである。

【略歴】

昭和12年5月5日 東京都生まれ 80歳
昭和16年 三世山本東次郎に師事
昭和17年 狂言「^{しびり}痿痺」で初舞台
昭和36年 國學院大学文学部日本文学科卒業
昭和44年 梅若万三郎欧州能楽公演団（フランス・スイス・イタリア）に参加（他海外公演9回）
昭和47年 重要無形文化財「能楽」（総合認定）保持者
昭和47年 四世山本東次郎を襲名
昭和54年 （社）能楽協会常務理事（同56年理事、同58年まで、同62年常務理事、平成3年まで）
平成元年 （社）日本芸能実演家団体協議会理事（同4年まで）
平成7年 （財）杉並能楽堂代表理事（現在まで ※同23年一般財団法人へ移行）
平成19年 （社）日本能楽会常務理事（現在まで ※同24年一般社団法人へ移行）
平成24年 竹田市名誉市民
平成24年 杉並区名誉区民
平成24年 重要無形文化財「狂言」（各個認定）保持者

【賞歴】

平成5年 芸術選奨文部大臣賞
平成7年 観世寿夫記念法政大学能楽賞
平成10年 紫綬褒章
平成13年 エクソンモービル音楽賞（邦楽部門）
平成19年 日本芸術院賞（「狂言の伝承・普及を通じ、能楽の発展に尽くした功績」に対して）

(1) 概要

日本芸術院は、日本芸術院令第3条に基づき、芸術上の功績顕著な芸術家の内から補充すべき会員を毎年会員による選挙を行い決定しています。

日本芸術院は、その前身である帝国美術院が森鷗外を院長として大正8年に創設されて以来、現在まで約100年の歴史を持ち、日本芸術院会員への選考は、美術、文芸、音楽、演劇、舞踊等の芸術各分野の芸術家から栄誉あることとして広く認識されています。

日本芸術院会員は、一般職の国家公務員（非常勤）で、年金額は250万円、任期は終身です。

(2) 選考方法

日本芸術院会員候補者の推薦は、毎年度、日本芸術院会員により行われ、全会員で組織する会員候補者選考委員会において選考します。日本芸術院は、各部における選考、総会による承認をもって会員候補者を決め、その候補者について、各部において会員による投票を経て、総会の承認を得ることにより決定します。

(3) 選考経過

平成29年8月25日から9月8日までの間、日本芸術院の会員に対し候補者の推薦を求めたところ、第一部（美術）7名、第二部（文芸）11名、第三部（音楽・演劇・舞踊）3名、合計21名の推薦がありました。

平成29年10月20日に開催した全会員で組織する会員候補者選考委員会において、21名の被推薦候補者の中から、第一部7名、第二部7名、第三部2名、合計16名の会員候補者を選考しました。

会員候補者16名について、平成29年10月20日から10月27日にかけて、各部において投票を行い、平成29年11月1日開催の部長会議において開票した結果、第一部3名、第二部4名、第三部1名が部会員の過半数を得て当選し、会員候補者に内定しました。

内定者について、書面による会員総会の承認を経て平成29年11月15日会員候補者として決定しました。

(4) 上申

上記会員候補者8名について、文部科学大臣に上申しました。

(5) 会員数

芸術院会員（定員120名）は、第一部（美術：定員56名）は現員43名に3名加わり46名、第二部（文芸：定員37名）は現員27名に4名加わり31名、第三部（音楽・演劇・舞踊：定員27名）は現員26名に1名加わり27名となり、現員104名となります。